

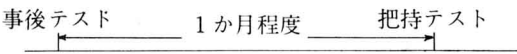
なお、この場合、学級の人数が30～45人ぐらいで少ないので、有効度指数や正答率、それに次に説明する把持率などは、小数第1位を四捨五入して、整数値で求めておけばよいでしょう。

(表2)は、(表1)の諸結果を見やすくまとめたものです。ここで、変容のグラフとは、事前テスト、事後テストの正答率をグラフに表したものです。研究物としてレポートにまとめる場合には、この(表2)をのせておけばよいでしょう。ただし、このまとめ方はいろいろありますので、これにとらわれず、自分で工夫してみてください。

② 把持率(定着率ともいう)とその求め方

一群法での仮説が、学習事項の定着に関するものである場合に、仮説の効果を測定するものとして、把持率が用いられます。

把持率は、次式⑧によって、小間ごとに求めます。


$$\text{把持率} = \frac{\text{事後テストの正答者のうち、把持テストの正答者数}}{\text{事後テストの正答者数}} \times 100 \dots \dots \text{⑧}$$

把持率は、事後テストの正答者のうち、一定期間後も実験教材内容を把持していた者の割合を示す数値で、この数値の大小で、定着の度合いを判定しようというのです。事後テストの正答者が、把持テストで全員正答のとき、把持率は最高の100になります。

仮説が有効であれば、把持の度合いも高くなり、把持率が100に近ければ近いほど仮説が有効であったと判定します。

しかし、この数値が、どれだけになれば仮説が有効であったと判定してよいのか、基準となるものは何もありません。

それで、これも有効度指数の場合と同じように、平素の他教材での把持率と比較して、仮説の効果を判定することになります。

次に、(表3)によって、小間ごとの把持率を求めてみましょう。